加茂重藩之御夏

ル 4
328
5

呂門
328
巻 5

北越雪譜二編 巻二目録

○雪頽の難
○雪頽より熊を得る
○龍燈
○雪中の葬式
○芭蕉翁の遺墨
○芭蕉略傳
○化石溪
○たゞ城の容貌
○亀の化石
○夜光の玉
○餅花
○齊の神勸進
○天狗の神祭事
○天狗羅の始原
○煉羊羹の起立
○雪中の狼

通計十六條

雪譜二編巻之目 目録 文錦堂蔵

本舗近刻

○骨董集三編二巻四編二巻

右醒齋京傳先生遺稿京山人百樹翁補訂

百樹翁著

○和漢印章考三巻　仝

○女粧考前後六巻　仝

以昏ハ上古より近古ハ至るまゝ〳〵古図を載古昏を引て説を下し女の風俗ハ係りたる事ハ包羅輯載して餘ことゝ〳〵且国字の昏ハ婦人乙夜の覽ハ供すゝ〳〵蓋茲本編雪譜の餘帝愛ハ有を以姑近刻二家の著目を挙伏請

雲顧の諸賢刊ハ先るの竈評是祈

江戸　書賈　文溪堂　謹白

北越雪譜二編　巻二

北越　鈴木牧之　編選

江戸　京山人百樹　増修

○雪頽ハ熊を得

酉陽雑俎ハ云熊膽春ハ首ハ在り夏ハ腹ハ在り秋ハ左の足ハ在り冬ハ右の足ハ有りといへり余試ハ猟師ハ問ハ熊の膽ハ常ハ腹ハ有て四時同じ〳〵なり蓋漢土の熊ハ酉陽雑俎の説のごとくなれども凡猟師山ハ入りて第一ハ欲る処の物熊なり一熊を得ればその皮とその膽と大小ハ金五両以上ハ値るゆゑハ猟師の欲るものゝ中にも熊ハ猛く且智ありて得ること易からぬ雪中の熊ハ皮も膽も常ハ倍すゆゑハ雪ハ穴居をる故尋ね捜し猟師ども力を戮せて捕ふ種て

の術ある事初編に記せり たまゝ一熊を得るとも其皮に價と分ゆる利得薄しさるゆゑに雪中の熊ハ一人の力にてハ得事難しとぞ○茲に吾が住近在に后谷村といふあり此村の弥左エ門といふ農夫老うる双親年頃のねがひにまかせ秋のなゝめ信州善光寺へ参詣させけりさてある日用あつて二里だうの所へゆきたる留守隣家の者過て火を出さしたちまち軒ふうつりけるバ弥左エ門が妻二人の小児をつれて逃去て命一ツを助りくるのゝ家財ハのこらずぜ目前の烟となりぬ弥左エ門ハ村ふ火災ありときゝて走飯りしに今朝出し家い灰となりてたゞ妻子の死亡をよろこぶのゝ此夫婦心正直にして親ふも孝心ある者ゆゑ人こゝを憐みまづもゝらく我が家ふ居るゞしもゝ奬る富農もあつてけるゞつゝもゝ奴僕の業をとりても恩に報ゆゝるゞ双親飯り来りて

賜ハゝ双て人の家に在らんハ心も安からゞして諾ず竊に田地を分ゝ貸入ふしその金を借て假に家を作り親も飯ア住けり草を刈鎌をさゝ買求るほどありけるバ火の為に貧くなりしふ家を焼る隣家一對て一言の恨をいゝず交り親むこと常よりもこゝろかくてその年もくれて翌年の二月のなゝめ此弥左エ門山に入て薪を取りしに谷に落る雪頽の雪の中にきゝ小くしく黒き物有遥ふこゝを視てやしに人のなゝきふうこゝを死しくるゝゆゑと辛じて谷よりより是を復きバ稀有の大熊雪頽に打敷たるなりけゆ此雪頽といふ事初編にもくゝ記るゝごとく山に積りくる雪二丈にもあまるゞ春の陽気下より蒸て自肌に碎け落る事大磐石を轉しおとすがごとしこゝに遇で人馬ハさらなり大木大石もうちおとさるゝさまバ此熊もこゝにうこゝまきくるゝ弥ざまゆんハよきものをこゝけくりと大に悦びゆゝと

臍もとらんとおもひ〳〵ゞ日も西ゑ傾くまゝバ明日きゝとらんとて人の見つけざるゆうよ山刀わゝ熊を雪ゑ埋めかゝ〳〵心ゑ用ゐるとゝ家中のゝり親ゆもかゝりてよろこゞせ次のあ〳〵皮を剥ぐゝ用ゐるとゝ〳〵てかゝるゝ〳〵ゑ臍ハ常よ倍して大ゝ〳〵ゆゑ弁当の面桶ゑ入まて持ゝゝ〳〵人ありて皮を金一両臍を九両よ買ゝゝ弥ざゑもんたゝらず十両の金を得て質入をせ〳〵田地をもうけゆゞ〳〵まゝよう屋幸ありて在ゞゑゝ家もあらゝよ作りたていぜんゑ固さりて采けり弥左ヱ門ゞ雪頽よ熊を得ゝるハ金一釜を掘得ゝる孝子ゆも比まゞゝく年頃の孝心を天のあゝれゝ王ひ〳〵ならんと人々賞〳〵ゝと交谷鶯翁ゞかゝうき

○雪頽の難

吾ゞ住塩澤ハ下徂六十八ケ村の郷元ゝまゞハ郷元を眞ゝり知る家中ハ古来の記録も残ゝう其旧記の中ゑ元文五年庚申（今より百年まゝ）正月廿三日暁湯沢病の枝村捉切村の后の山より雪頽不意ゑ押落し其响百雷の如く百姓彦右ヱ門浅右ヱ門の両家なゞまゑゝゝれく家つゞまゝ彦右ヱ門并ゑ馬一疋即死妻と嗣息ハ半死半生浅右ヱ門ハ父子即死妻ハ梁の下ゑ壓まゝて死ゑいゝらず此時　御領主より彦右ヱ門息一米五俵浅右ヱ門妻一米五俵賜一事を記一あり此魚沼郡ハ大郡中て　会津侯御預りの地あり元文の昔も今も御領内の人民を恤ヱゑ事仰ぐ〳〵尊む〳〵そのありがゝきを吾ゞ后一も示さんとて筆の序まゝるせう近年ハ山家の人家を作るゑ此雪頽を避て地を計るゆゑそのの難まゝまゝあれゝも山道を往来まゝる時ゆだまゝようゝまゝ死まゝるゝの間あゝる事まゝり初編ゆもいゝるゝ如く

○ホウラい谷ゆあり雪頽ハ春ゆあり他国の人越後よ来りて山

下と往来せざホウラあぐまを用心まで〳〵他国の人こゝまゝ死〳〵たる石塔今も所〻ふありおそるべし〳〵

○雪中の葬式

吾が国ハ雪吹といふハ猛風不意ハ起りて高山平原の雪を吹散〳〵その風四方ハふきめぐり〳〵て寒雪百万の箭を飛そゞ如く寸隙の間をも許さびゝさいるゆゑまゝて往来の人ハ通身雪ハ射まて少時ハ半身雪ハ埋まて凍死する支まゝ〳〵もいとゞ〳〵ハ晴天なも俄ハ〳〵ゝ二日も三日も雪あまゝ〳〵てふぶきあり事あり往来もこまゝ為ハとまることゝ毎年あり此時ハ臨て死亡せしもの雪あれのやむを待も程のあるものゆゑせんゝ〳〵雪の風犯て棺を山〻ハ事あり施主ハいとゞもたのゞきゝ他人乃困苦辛見るもきゝのゞくあり〳〵雪国ハ一ツの苦状といふべし我江

戸ハ逗留せ〳〵ゝ旅宿のちゝきあゝふ死亡ありて葬式の日ハ嵐なゝふ宿の主もこまゝふ往とて雨具きびゝ〳〵ゝ今日の仏いとゝるゝ因果ものゝやかゝる嵐ハ値て人ハ難義をかゝるなゞ〳〵まゝいとても極楽ハゆゝるまゝ〳〵あゞつぶやきゝ〳〵立いゞるを見て吾が国の雪吹ハ比ぶまゝいゝ安〳〵とおもゝて

○龍燈

筑紫のちゝぬ火とハ古哥ハもあまさよゝ〳〵むゝ〳〵ゝ〳〵ゝの名たゝくあまゝ祈く人のゝる所ゝ所ゝ技の業ゝさまハ春暉ぶ西遊記ハもゝぬ火を視たりゝ詳ハゝるゝセリ甚ゝぬ火とゝふも世ハ竜燈のたゞひゝ〳〵べし我国浦原郡ハ鐙湾ゝ里言ハ潮湾と云東西一里半南北一里の湖水あり毎年二月の中の午の日の夜酉の下刻ハ丑の刻ハ頂まで水上ハ火然ゝを里人ハ鐙湾の万燈ゝ辭リ現る人多〳〵余が友人ハ豆をゝるをきしハ此の

西遊記ふ志ゝるつしの志ゝ女火とおあ　ざまあり　近年湖水を北海へ
おとゝ新田とあしを多湖中の万燈も今人家の億燈とあまり又我国の
八海山嶽ふ八ツの池あり依て山の名とす絶頂ふ八海大明神の社あり八月
朔日を縁日とゝ山ふのある人多ゝ此夜ふかぎりて竜燈あり其来る所と見
多る人なしとふおゝそ竜燈とふあおゝ不ゝ八春夏秋あり諸国ふある夏
諸書ふ志ゝるゝを見ふいづまも志ゝ海よりも出ゝよりもぐる
毎年其日其刻限定りある事甚奇異あり竜神より神仏へ供と云ふ
普通の説ふ是ゝあふ弥き竜燈の談ありかゝく竜燈を解べき説あき
バ如く志ゝて好事家の茶話ふ供す
我国頸城郡米山の麓ふ医王山米山寺八和同年中の創草あり山ふ
ふ薬師堂あり宮中女人を禁ず此米山の腰を米山嶺と云越後北海の驛
路あり此辺古跡多ゝ余先年其古跡を尋んとて下越後ふおもむき

時新道村の長飯塚知義の話ふ一年夏の頃雲のおふ村の者ども数人
米山へのぼりしふ薬師へ参詣の人山ごりをるためふ御鉢と云所ふ小屋二ツあり
其の小屋へ一宿志ふ是日六月十二日ふて此御鉢と云所へ竜燈のある夜あり
おもひまゝけずして竜燈を志る事よとて人ゝ志づまりをしふ西の刻と志る頃ゆく
ともあくきさりあつまりしふ大なるハ手鞠の如く小なるハ雞卵の如し大小ともふ此御
鉢とゝふあるをさゝずして飛行する事あるひハ西るやうあるひハ左ゝるそのさま
心ありて遊ぶが如し其光りハ螢火の色ふ似りつよくも光りよわくもひるあり
天井ひめぐりてちぐゝくもとぶまるハあくあまさありてかぞへ尽ちがたしやう小や
の入口を閉人ゝひとまりて覗みるに見こふ人あり多ゝもおもはざるやうふて大小の竜燈
二ツ三ツ小屋の表へ七八間さきふもゝゝきさりをかゞひりふすしこゝ見べ形ち鳥の
やゝふ見えて光りハ喉の下より旋つやゝあり猶近くよゝがかもたしふ
視るゞけんとおもひゝふちのくいよゝぶしてやゝふ飛めぐりこの此夜ハ山中

み一宿の心得あるべし心用の破れ筒をも持ぜしよ手たをの上手たるも若かの者しが光を的よくんとまるを老人ありてやはまてとおしへあるあるたゝ有り此竜燈ハ竜神より薬師如来へさけあるあり罰あらうと叱りる声ハ竜燈ハおどろきくるやうそたるう遠く乖さしと知義語るべき

○芭蕉翁が遺墨

おもて越後の雪をよくこゝろ哥あるべきとも越雪と目前〳〵よくこゝろるいまもあり　西行が山家集頓阿が草菴集ハも越後の雪の哥あり　坐韻僧こちも越地の雪いちゝるゞ〳〵　俊頼朝臣ハ降雪ハ谷の俤うづもれて梢そ冬の山路ありける　これらい実ハ越後の雪の真景ハまとゝも坐あるそん越後ハきこゝろ玉ひしゝハあらず俗よりく哥人ハ居ながら名所をきるあり　伊達政宗卿の御哥よ

さびとも誰ハ越ん関の戸も降うづめくる雪の夕暮　又

ふつゝらとゝるる道絶て雪ハ隣のちゝき山里　坐君ハ御名たゝのき哥仙ゆておもゝ〳〵まるゝ〳〵ゆるかるめでゝきき御哥もありて人の口碑ゆもつゝハ雪の実境をよゝ玉ひしゝハちゝ〳〵めて御国も深雪あるべ行り芭蕉翁が奥ハ行脚のゝるゝ越後ハ入り新潟ゆて

海ハ降る雨や恋しきうき身宿　寺泊ゆて　荒海や佐渡こ

横〳〵ハ天の川　こゝ夏秋の遊杖ゆて越後の雪を見ざる事必せり

さゝゝ〳〵ハ近来も越地ハ遊ぶ文人墨客あまゝあるとゝ秋のまるハい

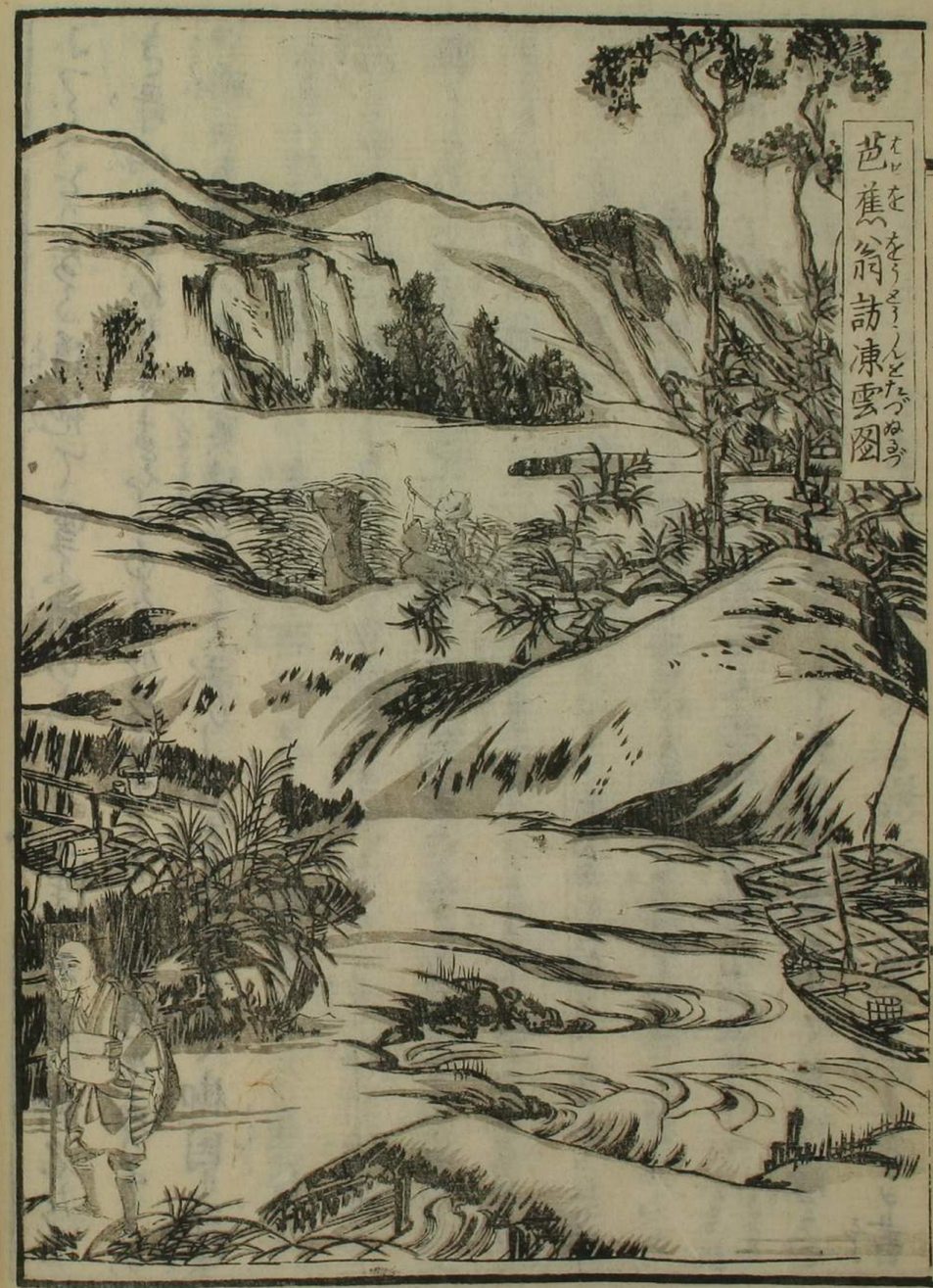
ゝゝ〳〵ハ雪をおそれて故郷へ逃飯るゆゑ越雪の詩哥もゝ〳〵紀行

ともあ〳〵稀ハハ他国の人越後ハ雪中もるも文雅るべきい筆ハのこ

す事あ〳〵吾が国三条の人崑崙山人北越奇談を出板せ〳〵が（六巻絵入ハ本）

文化八年板　一辞半言も雪の事をもるべ今文運盛ゆ〳〵て新板湧うご

とくあるべども日本第一の大雪ある越後の雪と記〳〵る書


芭蕉翁訪凍雲図

凍雲を
たづね侘て
菓樹年
いつ通り
志を
忘れ枕
大茂

ふ〜ゆるゝよ吾ゞ不学とも忘れて越雪の奇状奇蹟を記しき
後来よ示〜且越地ふ係り〜事ハ姑く載て好事の話柄と寸
さて元禄の頃高田の御城下ふ細井昌庵といひ〜医師ありけり
一ふ青庵といひ俳諧を善〜て号を凍雲といりひ〜せたせ翁
奥羽あんぎやのゝり凍雲をたづ絆て「菜櫚よいづまの花を草枕」と
発句をけまバ凍雲とりあ〜ず「萩のすゞまを巻あゞる月」此時の
たせ翁が肉筆二枚ありて一枚ハ孚損と覚〜く淡墨をゆて一抹乃
痕あり二枚とゆふ昌庵主の家ふつ〜くを后ふ本昏ハ同所の親族
三崎屋吉兵衛の家ふつ〜く昏損のハ同所五智如来の寺ふのこまりち
るふ文政のころ此地の　邦君扙雅とこの〜王ひ〜ゆゑかの二枚持主よ
り奉りけまバ吉兵ヱ〜常信の三幅對よ白銀五枚りの寺「もあつき賜あ
りて今二枚とゆふ　御藏とありぬと友人葵亭翁がものがたり〜つ

葵亭翁ハ蒲原郡加茂明神の修験宮本院名ハ義方吐醋と号し
又無方斎と別号して隠居〜て葵亭といふ和渋の博識北越の聞人
あり芭蕉ゞ件の句ものふ見えざるといはるせり
百樹曰芭蕉居士ハ寛永廿年伊賀の上野藤堂新七郎殿の
藩ふ生る次男あり寛文六年歳廿四ゆ〜て仕絆を辞〜京ふいで〜季吟
翁の門ふ入り昏を北向雲竹ふ学ぶ〜め宗房といりて季吟翁の
句集のものゆを宗房とあり延宝のすゑ〜めて江戸ふ来り杉風が
家ふ寄小田原町鯉屋藤左ヱ門　剃髪〜て素宣といり桃青ハ后の名ふり
芭蕉とハ草庵ふ芭蕉を植〜ゆゑ人よりよびる名の后ふハ自号
ふよりて翁の作ふ芭蕉と移辞といふ文ありその終りの辞ふ「たまく
花さくら花ゆゑふらず芦太けまども斧ふあたらずかの山中不材の
類木ふたぐ〜てその性よ〜僧懐素ハ是ふ筆を走らし張横渠と

新葉を見て修学の力とせしとあり予その二ツをとらずたゞ炊蔭より遊びて風雨ハ破を易きを愛せ「ゑせ氏野分して盥ハ雨をきく夜」炊邑蕉庵の旧蹟ハ深川清澄町万年橋の南詰ハ対ひしる今或侯の庭中ハ在り古池の趾今ハ存せりとぞ（余芭蕉年表一名ゑせ氏年代記とゝもゝ考証未定ゆゑに刻とやゝさず）翁身を世外ハ置て四方ハ雲水〜江戸ハ趾をとゞめず終ハ元禄七年甲戌十月十二日「旅ハ病て夢ハ枯野をかけ廻る」の一句をのこして浪花の花屋ゞ旅囱ハ客死せり埜を作ゝり昏肆刺とゝもゝ

是摩世の知る処あり翁ゞ臨終の事ハ江州粟津の義仲寺ハのこしる榎本其角ゞ芭蕉終焉記ハ目前視るゞ如くハ記り炊記を視るハ翁いゝ〜〜菌毒ハあゝりて痢とあり九月晦日より病ハ臥僅ハ十二日ハ〜て下泉せり炊時病床の下ニあり門人○木節（翁ハ茶をあゝ〜たる医なり）○去来○惟然○正秀○之道○支考○春舟

○丈草○乙州○伽香以上十人あり其角ハ炊時和泉の淡の輪とハ所ハあり〜ゞ翁大坂ハきて病ともゝ〜ずして十日ハ寿り十二日の臨終ハ遇て奇遇といふべし（以上終焉記を摘要せり）其角ゞ終焉記の文中ハ（炊記義仲寺ハ施板ありて人のもゝよ又キ角ゞかれをゞあつまれやゝ）『義仲寺ハうつして葬礼義信を尽し京大坂大津膳所の連衆彼官従者までも炊翁の情を慕ふるハて招ざるハ馳来る者三百余人あり浄衣その外智月と（百樹云大津の米屋の母翁の門人）乙州ゞ妻縫たてゝ着せまゐらす』又曰『三千餘人の門葉辺遠ひとつハ合信せる因と縁とハ不可思議いかもゝ勘破ゝ〜』百樹おもふらく孔子ハ三千の門人ありて門ハ十哲をいゞす芭蕉ハ二千の門葉ありて庵ハ十哲とよぶ門人ありし至善の大道と遊藝の小技と尊卑の雲泥ハ論ハおよばざれども孔子七十ハして魯国の城北泗上ハ葬て心喪と服せる弟

子三千人芭蕉五十二ゆゑして粟津の義仲寺ふ葬る時招ざるふ来る者三百餘人是以人ふ師たるの徳あるをおもふべし

盍芭蕉の盆石ゞ孔夫子の泰山ふ似るをいつまふり芭蕉曽駐俭の風輕薄の習少しもあらしハ吟咏文章あてもちらる共翁ハ其角がいひしごとく人の推慕する事今ふ於も不可思議の奇人ありされば一句一章とつども人こゝ我句碑ふ作りて不朽ふ傳ふる事今猶句碑のあらざる国あ一吟海の幸祥詞林の福禎文藻ふ於て共人の右ふ出る者あ一さまとバ本文ふもいるまでくかりそめふいひまてくる茶櫛の一句の墨痕も百四十余年の后ふいくらて文政の頃白銀の光りをたもつそゝ一論外不思議といふべし

蜀山先生嘗謂予曰凡文墨をもて世ふ遊ぶ者再ハ論せず死後よいくゝ一字一百銭ふ当らるゝ身ゝあゝゝ文雅幸福足ゝ

まゝき共先生ハ今其幸福あり一字一百銭ふ当らるゝ事嗟乎難れ

○さてまゝ芭蕉ゞ行状小傳ハ諸昏ふ散見して普く人の知る所ありまゝとも翁の容貌ハ挙世知る人あらゝゝゞさまゝバ爰ふ一証を得るゆゑ共雪譜ふ記載して后来ふ示をいかるる瑣談も世ふ埋寃せん事のをしけまゝバいざ狀バとて雪ふ摶す筆の老婆心あり○まゝふ二代目市川團十郎初代段十郎（のち團ふ改む）の俳号と嗣で才牛とつゝふ后ふ柏莚とあらたむ（元文元年あり）共柏莚ハ。正徳。享保。元文○寛保ゑ盛ふ歴ゝる名人あり妻をおさいといひ俳名を聖仙とつゝ夫婦ともふ俳諧を能し文雅を好り共柏莚ゞ日記のやうふ昏残したる老の楽といふ随筆あり（二百四十五年の自筆あり）嘗柵外（山さぐりし）を狂哥坐真顔翁珎昏ゆゑとバ懇望してかの家より借りる時余も亡兄ともふ読しことあり其ありきそのあゝふ芝居土用やまそこの

うち柏莚一蝶が引船の絵の小屏風と風入まとする旁あて人
參をきざこちがら吠繪ふむかーをおもいぐるーて独言いひる
を記ーくる文ふ「我ま幼年の頃もじめて吉原を見る時黒
羽二重よ三升の紋つけるふり袖を着て右の手を一蝶ゆひう
ま左りと其角ゆそうまて日本堤を往ー事今ふ忘ず吠ふり
い世ふ名をひぐうせうれど今ハなのき人あり我い幸ふ世ふありて名
もまくと頗る聞えうり中略今日小川破笠老まゐらるむのーの
たちのーせらまくるゆうふ芭蕉翁いかとおのてうまそいゆあそいろ白
く小兵あり常ふ茶のつむぎの羽織をきらまと嵐雪よ其角が所
ついてくるぞよとゆのちづふいをまーとくらまたり」此文全吠
を今目前ふ見るが如ー翁の門人椎然が作とくふ公羽の肖像あるひい画幅
ーの肖像世よ流傳まるものー世説とあるせ視る
小川破笠俗称平助壮年の頃放蕩ゆて嵐雪と俱ふ俗称服部彦兵工

其角が堀江町の居ふ食客たりー事件の老の樂又破笠が
自記ゆも見ゆ破笠一ふ笠翁まと印觀子梦中庵等の号あり
絵を一蝶ふ学び俳諧ハ其角を師とて余が藏する画幅ふ延享
三年丙寅仲春梦中庵笠翁八十有四華とあり描金を善して
人の粕をなめず別ふ一趣の奇工を為す破笠細工とて今ふ賞
せらる吉原の七月創て機燈と作りて今ふ其余波を殘り傳詳
ならずもさのくふとてもくせり

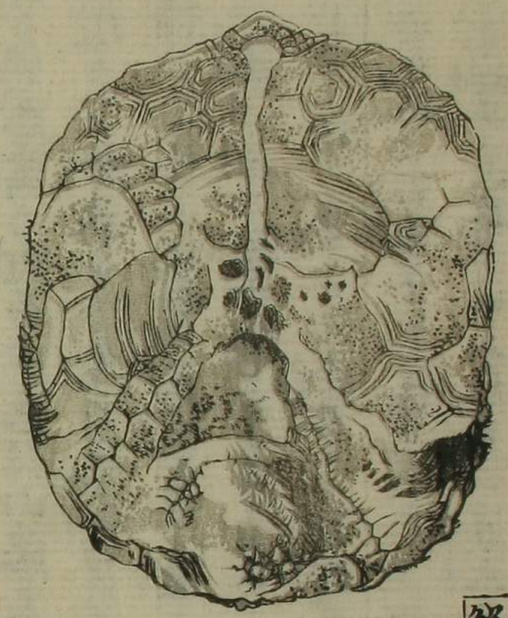
○化石溪

東游記よ越前国大野領の山中ふ化石溪あり何物ゆても半月あ
るひハ一ケ月吠溪ふ浸ーおけばかるーず石ふ化す器物いさらまり紙
一束藁ゆてむまびくるが石ふ化くるを見くうとまくせり我が越後ゆも
化石溪あり魚沼郡小出の在羽川とくふ溪水一蚕の腐たるを流ーく

一夜ゐして石ゐ化したりと友人菱亭翁がくらまきかの大野領の化石溪ハ東游記の為ゐ名高けれども我ら国の化石溪ハ世ゐしられず又近江の石亭ゞ雲根志変化の部ゐ前編人あり語云越後國大飯郡ゐ寒水滝といふあり此処深山幽谷ゐして互寒の地なり此滝坪ゝ万物を投こめおくゐ百日を過ずして石ゐ化すとぞ滝坪の近所ゐて諸木の枝葉又ハ木の実その外生類までも石ゐ化するを得るとぞ予去る頃安滝の石を取よせ一人ありて見るよ常の石ゐあらず全躰鐘乳ゐり木の葉をぞ石中ゐふくむ則石ゐり雲林石譜ゐいふ鐘乳の摶化して石ゐなるべらん云云牧之案るゐ越後ゐ大飯郡ゐ又寒水滝の名もきゝず人あり語るとあるハ傳聞の誤ゐらん盖北越奇談ゐ会津ゐ隣る駒ゞ岳の深谷ゐ入ること三里ゐして化石溪と名付る処あり虫羽草木といへども溪ゐ入りて一年を歴ざるゐ化して石となる其川甚苦寒ゐして夏も渉ゞらざるゞ如し又蘓門岳の北下田郷の深谷ゐも化石溪あり云ゝ雲根志の説ハこれらの所を聞誤るなるべし

○亀の化石

吾ゞ同郡岡の町の旧家村山藤左エ門ハ余ゞ壻の兄ゐり此家ハ先代より秘蔵する亀の化石あり傳ていふ近き山間の土中ゐるを掘得たりゐ実ゐ化石の奇品ゐり茲ゐ図を挙て弄石家の鑒を俟百樹曰件の図ゐ視るゐ常ゐある亀とハ形状少〻異ゐるゆゑゐり依て案るゐ本草ハ所謂秦亀一名筮亀あるひハ山亀といひ俗ハ石亀といふ物ゐやわらん秦亀ハ山中ゐ居るものゐりゆゑハ呼で山亀といふ春夏ハ溪水ゐ遊び秋冬ハ山ゐ藏る極て長寿なる亀ハ是ゐりとぞ又筮亀と一名するハ周易ゐ亀を焼て占ひ



甲之図

腹之図

鱗之化石

腹之図

堅 曲尺五寸五分
横 四寸五分 厚二寸六分
重 八百目

しかも亀あるとて件の亀の化石本草家の鑒定を得て素亀あるべ一層の珍を増し山にて掘得ることあるべ素亀ふちきやうきやう化石といふものあまた見しふ多ハ小きものにてあるひいまく休全も稀なり図の化石ハ休全く且大なり珍とすべし。余先年俗ふいふ大和めぐりをしたる半月あまり京ふあるべ旧友の画家春琴子ふ就て諸名家をたづね〳〵時鴻儒の聞高き頼先生（名襄字子成山陽号通称頼徳大郎）ふも訪ひ坐談化石の事ふおよび先生余ふ蟹の化石一枚を恵その色枯ずして生ゞ如く堅硬こゝハ石なり潛確類昏又本草三才図会等ふいへる石蟹泥沙と倶ふ化して石ふなりうるなるべし盆春なる石菖の下ふおく〳〵ふ水中ふ動ゞ如く亀の徒者ふ其図と出す是も今ハ名家の形見となりぬ

○夜光玉

雲根志灵異の部ふ曰予ゞ隣家ふ壮勇の者あり儀兵衛といふ或時田上谷といふ山中ふ行て夜更て飯るふむうるある山の澗底より青く光り虹の如く昇てまるい天ふ接る此男勇漢なれハ元二元三ふ草木を分けて山と越谷をけりてかの根元をさぐりうるふたゞ何の異る事もなき石なりひろひとりて背ふ負ひ飯るふ道もぐら光るもの前の如く甚ゞ夜道の労をたすけり暁の頃我ゞ家ふ着ぬ件の石を軒の外ふ直く置朝飯ふぐもくもりて彼の石を見んとするふ石ふ〳〵ふせく事やらんとさゞめくふたづみかとむれども行方をもとめずとなん又本国甲賀郡石原潮音寺和尚のものがたりよ近里の農人畑を拵居〳〵ふ拳ふぐるる石をかりいぐせり此石常の石よりハ甚ゞうつくしくよりて取りかゝりぬ夜ふ入りて光ること流星の

如〜友のいふ是ハ霊石あり人の持ものふあらず家ふあ〜ぶ必災あるべ〜とゝ〜おやぶりてもつぶ〜と斧をきゝて斧をもつて打碎〜と竹やぶの中にもてゝり其夜竹林一面ふ光る事数万の蛍火の如〜翌朝近里の人きつゝ〜集り来り竹林をたづゆゝるふ中〜のゝぐまでも一石も有る事なし又筑后国上妻郡の人用ありて夜中近村へ行よ一ツの小川あり かちゝゝり せ〜ふるふやらん光る物あり拾ひとりてゝゝゝゝバ小石なり豆日さる方へ献ずもぐ〜くし笑ゝりとぞ以上

一条綾是等ハ他国の事なり我が越后ふも夜光の玉のあり〜事あり

新発田より蒲原郡東北加治といふ所と中条といふ所の間路の傍田の中よ庚申塚あり 炔塚の上ふ大さ一尺五寸ばかりの四石と鎮してゝゝゝを礼る 炔石その先農夫屋の后の竹林を掃除〜て竹の根もぐ掘るとてかの石一ツを掘得〜ゝその色青ゝありて黒く甚ざ

あゝらゝゝあり農夫ゝゝをもつて薬をゝろ盤とゝふす其夜妻庭ふ出〜ふ燦然〜て光る物あり妻妖怪ありとして驚叫家主壮夫三五人を伴ひ来りて光る物を打ふ石あり皆ゝて怪〜石と竹林ふ捨つその石夜毎ふ光りあり村人おそれて夜行ものふ〜依て炔石を庚申塚ふ祭り上ふ泥土を塗て光をかくす今猶苔むして あり好事の人この石をゝ〜ゝも村人祟あらん虞を懼てゆゝゝゝとぞ

又駒ゞ岳の麓大湯村と行尾村の間を流る〜渓川を佐奈志川といふ〜せ渇水せ〜頃水中ふ一点の光あり蛍の水よあるゞ如〜数日処を移さず一日暴雨よ水増て光り〜物所を失ふ后四五町川下よ光りある物蛍火の如〜炔地山中ふきバ村夫等昏愚ゆ〜く夜光の玉ある事をもゝず敢てたづゆゝとむる者もあり〜ふ其秋の洪水よ夜光の玉ふゝびもぐとて所在を失ひ〜ゝとぞ以上北越奇談の説

偖

茲ふ夜光珠の実事あり我文政二年卯の春下越後を歴遊せし
とき三嶋郡ふ入り伊弥彦明神と拜旧知識なるまゝ高橋光則翁と尋
しふ翁大ふよろこびて一宿を許しぬ此翁和哥を善し且好古の
癖ありて卓達の人なり雅談湧が如くおもゝず節をとゞめ事四五
日なり一夕翁の語りくるハ今より四五十年以前吉田の（三島郡の内なり）
をとり大島川といふ溪川ふ夜多く光りものありとて人怖て近づく
ものなくしふ此川の近所ふ冨長村といふありもくふ鍛冶の兄弟
あり一ひとりの母と養ふ家最貧し此兄弟剛気なるものゆゑかの光
り物を見きわめ妖怪なくバ退治して村のものどもゞ肝とむ
しんとする夜兄弟かゝふいとうしふをとうしも秋の頃水もま
さり川面をとるふ月暗くしてたゞ水の音をきくのみ両人炬
をふりてくてくとをとるふ光るものちらふくまゝ怪しむゞき

をとゞさて人のいふハ空言なんいぎとて飯らんとをとるふ水上
俄ふ光明を放つをやとて両人衣服を脱ぎて水ふ飛入り泳ぎよ
りて光る物を探りとるふくくり枕などなる石なりけるを取得く
家ふ飯りまづ灶の下よ置しふ光り一室を照せりもゝぐくのよし
母ふかくりけるバ不思議の宝を得たりとて親子よろこび近隣よりも来
りてをありしゞりのもらぬ者どもなるゞ趙璧隋珠ともおのゝまで
うち過ぎかくて后弟別家をする時家の物二ツふ分ちて弟ふ与んや
母のつひしふ弟ハ家財を望まで光る石を持去んとて兄がいとく光る
石を拾ひ得しハ我が企なり汝ハ我が力と助しのみなり光る石ハ親
の譲ふあらず兄が物なり家財を分ふくばおやのゆづりとをとるろ
べけんとて与ふまじく弟いふ（あの石ハおまゞのものなりいんとをとし
バ如ん身ハ光る石を拾んとの企ふまゝず妖物を退治せんとて川い

たりもん身より、我先より川へ飛いり光りものを探りあてゝかづき
あげゝも我あり方をとゝいれぐ〻記ろひ〻拡持さらんよるあるあらんいや
く此兄ものあり弟ぐのあり方と口論やまぞ終ふいつゝあひうちの
ひゝを母やりくゝまれしもづめちゝぶ光る石を二ツふ破りて分つゞと
いふ弟さらぐゝて明玉をとりいぐ〻鍛冶まる鑽の上ふのせ鎚をもて
力ふまりせて打ゝるとゝばをゝむゞゝ明玉碎破内ふ白玉を孕ゝぐそもも
碎け水ありて四方へ飛散ゝり其夜水のこゝゝ処光り輝く事蛍の群
さゝぐ如くまりゝふ二三夜やゝてその光りも消失けりとゞいふ頑愚の
手ふありゝといひあゝり稀世の宝玉鄙人の一槌をうけて亡びるハ
玉も人も倶ふ不幸とゝつゞゝと語らるとき牧之案ふ橘春暉ぐ著る
北囸瑣談後編の二藏石家の事をとゝ條ふ曰江州山田の浦の木之内古
繁伊勢の山中甚作大坂の加嶋屋源太兵卫其外ふも三都の中の

好事家侯國の逸人藏石ふ名の高き人近年夥ゝ余も諸家の
奇石を見ゝに皆一家の藏る処三千五千種ふいくゝる五日十日の
日を尽ゝてやゝ眼をゝるゝ支を得るふいくゝるその多き中ふ
も格別ふ目をおどろすがごの珎奇の物ハ无りのあり加嶋屋
源太兵卫ものゝりふ过ゝ年北国より人ありて拳の大さ乃
夜光の玉ありよゝ一室を照すよき價あゝハ貴んといひゝうぞ
即座ふ其人よ托ゝて曰其玉求たゝ暗夜ふその玉の入りる箱
の内ぐゝり白きやゝふ見えものば金五十両ふりもむゞゝ又その玉
わゝ闇夜ふ大ある文字一字ふても読えゝまもあば金百両ふりもむ
ゞゝ又昏狀よむがどゝゝば三百金いよゝ一室をてらさば五ぐ
身上のこゝずの力を尽ゝて求むゞゝ媒ゝて玉りるゞゝと
いゝぐゝのちもあの便も求てやゝぬ空言ふてありしと思る

云云 扨文段ハ天明年中藏石の世ふ流行たる頃加嶋屋ゞ話を
そのまゝふ春暉ゞ后よりたるゝゞしさて又余ゞかの鍛冶屋
ゞ玉のもゝ〳〵をきゝ〳〵ハ文政二年の春あり今より四五十年以前
とあまゞ鍛冶ゞ玉を碎きたるハ安永のすゑゝ天明のはじめ
あるゞ〳〵狀りとまれゞ藏石の流行る頃あまゞかのじまやゞ
話ふ北國の人一室ゞてらす玉のうりものありしといひ〳〵我ゞ国の
縮商人あくゞかぢやの玉の支をきゝつゝ商ハ口をいひ〳〵わそろ
らもとすゝるふ玉ハくゞきゝ〳〵ときゝてかゞまやゝ答へざりしゆや
あらん卞和ゞ玉も楚王を得ゝまゞこゝて世ふもいでゝゝを右ふのせ
たる夜光の話五ツあり三ツハ我ゞ越後ふあり〳〵事ゝりいゞゝも
世ふいでゝす嗟乎惜むゞ〳〵
百樹曰五雜組物の部ふ鍛冶屋ゞもゝ〳〵ふ類せる支あり

明の万暦の初閩中連江ゝの人器を剖て玉を得ゝまゝ
ゞも不識ゝをゝを意ふる珠釜の中に在て跳躍して定す火
光天ふ烛里人火事あゝんと驚き来りてゝまゝ救ふ玉を意ふ
ゝゝゝのゝのゆゑと聞て釜の蓋ハ啓ゝ已ふ玉ハ半枯ゝ
其珠徑一寸許ゆ真ふ夜光明月の珠あゝ俗子ふ厄せらまゝゝる
事悲夫〳〵記せり 人曰五雜組ふ魏の恵王ゞ径寸の珠前後車
十二乘の物むゝ〳〵の事今天庭ふも夜光珠いまし
と明人謝肇淛ゞ五雜組ふいゝり。神異記。洞冥記ふも夜光
珠の支見えゝまゝども孟浪ふ属す古今注ふハまゞまて大ふる
鯨の眼ハ夜光珠とゝゝて卞和ゞ玉も剖之中果有玉とい
ハゞ石中ふ玉を孕たる事鍛冶ゝ碎くる玉卞和ゞ玉ふ類せるゝ
趙の恵王ゞ夜光の玉を秦の恵王ゞ城十五と以て易んといひ〳〵ハ

加嶌屋が北国の明王を身上尽しつゝ買んと約せしふ類せり

さて又癸辛雑識続集巻下陸ふ機婦糸を水ふひ〳〵おきこるふ夜中白く大きゝ蜘蛛きゝりてその水をのむふ身ふ光りをたなりつかの婦人ことを見て大ゆゆしく雑竜を罩てうの蜘蛛をとらへしふ腹ふ夜光珠在ちき弾丸の如しと云るせり坎事を前文ふ收之老人が引〳〵る北越奇談王の部より越後よあり〳〵事ことゝぐせりその事癸辛雑識よりしもちがひ子おのつよ癸辛雑識い唐本ゆて且又容易ふい得ゝこゝき昏ふまゝバ北越奇談の作者俗子の目より奇をきりさんことてたゝむもよる越後の事ことてかきこゝるゝるゝ〳〵ゝ癸辛雑識続集ハ都下よりゝ得がけまゝ見るゆあるべゝふ博識ふ傳閲ちるるあるべゝ

又増一阿含経第卅三。等法品第卅九より轉輪聖王の徳よそなちゝる一尺六寸の夜光摩尼宝い彼国十二由旬を照すとあり文多けまゝいあげず蓋一由旬ハ異国の四十里ふり十二由旬ハ日本道六十六里ふり一尺六寸の王六十六里四方を照をハ奇異ふいゝ〳〵轉輪王此王と得て試ふ高き幢の頭ふ摩著けるふ人民等王の光りともちゝず夜の明〳〵りとおひ〳〵家業をそゝめちゝと記せり此事碩学の聞高きゝ了阿上人の話ふきゝてかの経と借得て読〳〵ゝしで夜光の王の親王ふるべき

餅花

餅花ハ夜ハ鼠がよ〳〵野山一ふ月とハ其角がまいのそゝずちふ了江戸ふどの餅花ハ十二月餅搗の時もちぞふ拵作り歳徳の神棚〳〵〳〵るよ〳〵俳諧の季ふハ冬とす我国の餅花ハ春ふり正月十四日までを大正月とひ十五日より廿日までを小正月とゝ是我里俗の習せふりさて正月十三日十四日のうちふ門松ちゝあがゝりと取了拂ひ我国長閑あゝふて八正月七日ふかゝざりけを十四日ちでゝるゝ餅花を作り大神宮歳徳の神夷ゆり〳〵餅花一枝ゝ神棚〳〵〳〵その作り

岡夫得名玉図

やうはいなどの木やなどふ木あるひは川楊の枝をとりこもとふ餅と
三角又は梅桜の花形ふ切るる紙かの枝ふきしあるひは團子と
もまゝふこしを蚕玉とふ稲穂又は紙ふて作りこる金錢縞あ
きびとあわどいちごなどのひ形を紙ふて作り農家ふてい木とけづり
て鍬鋤のたぐひ農具を小さく作りてもちぐるまの枝ふのくるまゝ
ておのもゝくゝ家業ふあづかるものゝひふること紙耕ることその業
の福といのるの祝事あるいもちぐるまを作るいおわるこつきものゝ
手業ふり祝ひとて男女ともうちまゝつて声よゝく田植哥とう
ふ故ことをときけば夏ごこひゝく家の上こす雪のたやくきえよ
かゝとおもふと雪国の人情ふり故餅花は俳諧の古き季寄ふ
もいでこれば二百年来諸国ふもあるい勿論ありちぐろ江戸ふそ
季ふよらず小児のこ遊ふ作りあきまりふときゝつ

斉の神勧進

我が塩沢近辺の風俗ふ正月十五日まゝ七八歳より十三四までの
男の童ども斉の神勧進とふ事をなすふ一冨家の童ども
紙ふすふ猫木を上下より削り掛て鍬の形を作ることと三棒
とふことと三本大ふきゝ上下とちゆゝ童僕ふ一外ますとふさ
せ又いひもありてこびかるありその中へ五六寸だりの木を頭
だり人形ふ作り目鼻ともづき二つつくりて女神男神とゝ女神
ハかゝらふ綿ときせ紙ふて作りこる衣服ふ紅ふて梅の花ふど
るづゝ男神ふい烏帽子をきせ木とけづりうけて髪とす紙のい
ふくふ若松ふどるづゝ故二ツ紙かの升の内ふおき斉の神勧進こ
とふびりありく敢物の欲ふもあらず一正月ふそびの一ツなり
こゝ二人のこふあらず児輩ふのくまる事ありこまるふ与ふるもの

切餅あるひハ銭をもらふ又まづしきものゝもらふハ五七人十人餘も黨をなし茜木綿の頭巾をあさぎのへりをとりたるをかむりかの斗棒に一本さしゝの二神と柳たるに入まて首にかけ「さいの神をくわん銭でも金でもくりやれとおいはひ門〻とおしありくもあり銭をもとめあるくあるひハ濁り酒などのませ顔に墨をぬりてもらひどよろこびこれをなぶりすまるならいせなり又長岡のあたりにてハかの斗棒のけづりかけの三尺ばかりあるに宝づくしなどゑがきたるをさして勧進するといふハ小児のみならず大人のいやしきがわざなり勧進のことばに「せにでもかねでもおいやらぬとらいねんの春ハ嫁でも聟でもとるやうに泉のすさらさくやうにすゝくらすそとおいはひ」くとして勧進の銭をあつめて斎の神を祭る入用とするなり又去年むこよめをむかへたる家の門に未明よりもらひにくれども

大勢あつまりかの斗棒をもつて門戸を敲きよめをだせむこをだせと同音によばゝりたゝくこれを里俗の祝事とすればいかる家なく小どもを入まて物などくれまわるなりかゝる俗習他国にもあるべきなるべし○さて此事たあひもなき小どものたはむれとのみおもひすぐせしに醍醐斎京傳翁が骨董集を読て本拠ある事を発明せり骨董集上編下に粥の木の條に○粥杖○祝木○おかつけ棒といふ物前にいひし斗棒に同じ京傳翁の説に粥の木とハ正月十五日粥を烹たる薪を杖として子もなき女のしりをうてバ男子をはらむとていはひ事しなりとて○枕の草紙○狭衣○弁内侍の日記その外くさ〴〵の書を引て上代の宮裏近古の市中粥杖の事を挙て考証甚詳なり今我が郡にいふ斗棒ハ則いにしへの粥杖の遺風なる事を発明せり我国にも祝木あるひハ御祝棒といふ所もありこれ七八百年前より

正月十五日よりする事京傳翁ゞ引まくる昏ゆくまらくまりそのゆ
引昏の中ゆも明人の作日本風土記ゆあるハゆ川とも我国のゆく
似くり炎昏ハ今より三百年だろういぜんの日本の風俗を明人う
聞つくて昏くるものゆまゆハ今我国ゆく小童のたくはまこゆを
るゆ三百年だろうさゆの風俗遠境ゆもうつりのこりたるあゆし
京傳翁ゆ引くる日本風土記巻の三時令の部にあり洪文の「但街道
郷村の児童年十五八九已上ゆ及ぶ者各柳の枝を取り皮とこり
木刀ゆ彫成ゆ皮と以復外刀上ゆ纏ひ用火焼黒め皮を
去り以黒白の花を分つ名づけて荷花蘭蜜とつゆ再荊棘の
條を取香花神前ゆ挿供次ゆ集る各童手ゆ木刀と執途ゆ
隊伍凡有婚无子の婦木刀と将て遍身ゆ之口ゆ荷花蘭蜜
と含ふかゆゆず炎婦当年孕男と生我国ゆて児童茅ゞ人の

門を手捧ゆくたき嫩をだせ聟をだせとのゆろうゆくハ右の風
土記の俗習の遺事ゆるゞ
百樹案ゆ件の風土記ゆ再び荊棘の條を取り香花神前ゆ挿
とゆハ餅花を神棚へ供ぜる事を聞て粥杖の事と混錯
くゆ記たるゆるゞ狀りゆ凡ハ餅花も古き祝事ゆり
ゆ
○齊の神の祭
吾ゞ国正月十ゆ日ゆ齊の神のまつりとゆハ所謂左義長ゆり
唐土ゆ爆竹とつゆ唐人除夜の詩ゆ竹爆千門の晌燈狀万戸明ゆり
の句あゆゆ爆竹ハ大晦日ゆゆる事ゆり吾朝ゆてハ正月十五日
清涼殿の御庭ゆくく青竹を焼き正月の昏始を炎火ゆ焼く
天ゆ奉るの又ゆて十八日ゆも又竹をかざり扇を結びつけ同
御庭ゆくく燃くゆ玉ゆを祝事とせゆ玉ゆ民間ゆもゆゆと学び

て正月十五日正月よかぞうたるものゝ炙あつそて燃すこと左義長
とて昔よりする事ありてこれを齊の神祭りといふも古き事ゝ
ゝ爆竹左義長の故事俳諧の季寄年浪草ゝ諸書を引て
くゝくゝいつる。吾ゝ郡中ゝゝ小千谷といふ所ハ人家千戸ゝ
あまる饒地ゝゝてこれゝゝ齊の神の齊あるひハ幸にも盛
大ゝゝてこれをまつりふその町ゝゝふおのゝゝ毎年さごめの場
所ゝゝくその所の雪をふゝこめゝゝとゝ三間だゝりふ
周ゝたる高さ六七尺の円き壇を雪ゝて作りこれゝゝふ二処
の上り階を作ることも雪ゝてゝる里俗呼て城といふさて
壇の中央ゝ杉のまゝ木をたてゝ柱ゝゝ正月ぞりゝるものゝふ
くれとゝ形くこの柱ゝ杉をびつけ又ハ積あげて七五三とゝゝて上
ゝゝ杉をまきくびてゝ杉頂ゝ

大根注連といふものゝ左右ゝ用ゝる扇をつけゝ飛鳥の状と作りて
つける壇の上ゝ席をまゝけゝ神酒をそなへゝ此町の長ゝるもの
礼服をつけゝ拜をゝゝ所繁昌の幸福をいのる此事をそなへ
きよめたる火を四隅より移て油滓ゝゝ火のゝゝり易きゝゝて
なゝゝゝゝ烏帽ゝ燃ゝ狀あゝる世火ゝて餅とゝきゝゝゝ病をのゝ
是則爆竹左義長ゝり他国ゝてもゝる事ゝり或人の話ゝ此事
百余年前まで江戸ゝもありしゝ火災をゝゝるゝゝゝ材木下て
ゝゝゝゝゝ。さて又ゝんべゝゝふ物を作りてこの左義長ゝ翳て
火をゝゝゝ焼を祝事ゝ守ゝゝんべハ御幣の訛信ゝりその作り
やゝハ白紙ゝ色ゝゝゝを数百枚つきあゝせゝゝを細き幣束
のゝゝふきりきげゝゝゝふ扇の地紙の形をきりのゝゝてゝゝ
数千あつめて青竹ゝゝゝ大小長短ハ作る家の意ゝ

文庫堂蔵

はゝせたるを以て人ふ誇る棹の末ふひらき扇四ツをよせて扇
ふい家の紋をでいろ〳〵ろ〳〵紙ふて作るものゆゑ甚こ美事
ありこれを作りてまづおの〳〵門〳〵建おく事五月の幟のあ
つひあり十五日ふいたりてかの場所〳〵ゆきゆき左義長ふかざ〳〵く
焼捨るを祝ひと〳〵慰とゝも覗る人群を形ふ八勿論事をそうてハ
こゝの〳〵ゆゑて喜酒の宴をひらく〳〵ゆゑこれ　國君盛德の餘澤
あり他所ふも左義長あるゆゑ小千谷を盛大とす

百樹曰余京水をたゞく越後ふ遊び〳〵時此小千谷の人
岩淵氏牧之老人親族あり の家ふ節をとゞめ〳〵る事十四日八月あゞ
の嗣子廿四五許号を岩居といふ昏をよくゝて余ふ遇せ〳〵ゆゑ
甚篤小千谷ハ北越の一市会商家鱗次として百物備ざるゆゑ
〳〵海を去る事僅ふ七里ゆゑふ魚類ふ乏〳〵からず

余塩沢ふあり〳〵ハ四十余日其地海ふ遠く〳〵て夏ハ海魚ふ
乏〳〵く江戸者の口ふ魚肉の上らざり〳〵事四十余日小千谷
ふいたり〳〵てはじめて生鯛を喰せ〳〵ふ美味あり〳〵事いふての
らず又鮭の時節ふ〳〵小千谷の前川ハ海ふ朝ゆるの大河ゆゑ
ハ今捕〳〵をゆゑ不庖丁ゆゑ味ゆひ江戸ふまされり一日鮭をてん
ぷらとゝふ物ふてゞせり余岩居ふむかひこゝふハ此地ふ〳〵ふ
名を何とゝゞぞと問ひ〳〵ふ岩居これハテンプラとゝふあり我
〳〵ごろ此物の名義曉〳〵がく〳〵古老ふたづねこれどもゆゑる人
さらふあゝ〳〵先生の説をきゝんとゝふ余答てまづ食終てテンプ
ラの来由を語り〳〵ものひつ〳〵鮭のてんぷら〳〵と飽まぞふ喰せり

○てんぷらの説。煉羊羹の起原

岩居ふ語て曰今をさる事五十余年前天明の初年大阪

やく家僕四五人もつかふほどの次男年廿七八なりける利助といふ
ものその身よりとしの三ツもうへの哥妓をつれて出奔し江戸に下
り余が家の京橋南街第一衖對ひの裏屋に住しに一日事の序によりて
余が家に来りしより常に出入して家僕のやうに使ひなどさせ
けるに花柳に身を果しけるものなれどもおもしろく才
ありてよく用を弁ずるものなれバ親しく交りけるに亡兄
をたのもしきものにおもひけるある日利助いふやう江戸にハ胡麻揚の辻
賣多し大阪にてハつけあげといふ魚肉のつけあげあまたありけるものな
り江戸にハいまだ魚のつけあげを夜見世にうる人なし我これを
うらんとおもふハいかん亡兄傳京いふそれハよきおもひつきなり先
こゝろむべしとて俄に調じさせしにいかにも美味なり利助いはく
これを夜見世の辻にうらんにその行灯に魚のごまあげとかゝ
さんもさのみめづらしからずなにとぞ名をつけ玉ハれと亡兄にこひ
けれバ亡兄しばらくしあんして筆をとり天麩羅とかきてみ
せければ利助不審の皃をなして天麩羅とハいかなる所謂に
かといふ亡兄うちゑみて足下ハ今天竺浪人なりぶらりと江戸
へきたりて賣創る物なるに天ぷらなり是に麩羅といふ字を下し
たるハ麩ハ小麦の粉にてつくる羅ハうすものとよむ字なり小麦
の粉のうすものをかけたるといふ事なりと戯言云ければ利助も
洒落たる男なれバ天竺浪人のぶらつきなれバ天ぷらハおもしろしと
大によろこびやがて夜店をいだして時あんどんを持きたりて字を
こひしなれバ余がをさなき時天麩羅と大書して与へしに其てん
ぷら一ツ四銭にて毎夜うりきるゝ程なりさて一月もたゝざるうち
に近辺所々にてんぷらの夜見世出て今ハ天麩羅の名油のごとく

世上に傳染より此小千谷までもてんぷらの名をよぶ事一奇
事といふべしされども京傳翁が名づけ親にて利助が賣そめ
たりといへる碩学鴻儒の大先生もしらずてんぷらの講
釈なきは天下に我一人なりとたかぶりけれバ岩居も手をうちて
笑ひけり○先年此てんぷらの話を友人静盧翁に語りしに
翁ハ和漢の博達時鳴の聞入なり 翁曰事物紺珠 明人黄一正作廿四巻 夷食の部にてんぷらに
似たる名ありきといふものも其昏を借りそてよびしに○塔
不刺とありて注に○葱○椒○油○醤と熬後より鴨或ハ雞○
鵞をいれ熳火にて養熟とあり蟹とあぶらげにせるかと見えたり
○さて天麩羅の播布に類せる事あり因に記す○橘菴漫筆に
享和元年京の田仲宣作 「京師下河原に佐野屋嘉兵衛といふもの 享保
年中長崎より上京して初て大碗十二の食卓を料理して

弘めたる是京師浪花に食卓料理の初とぞや今ま彼娘なんとい
つるものの老婆にありて近頃まで存命せり則今の佐野屋祖なり
り大坂にもかしこに食卓料理あまた弘りたれど野堂町の貴
徳斎など久しくつゞきたる家なし」岩居がてんぷらをふるまひたる
夜その友蓉岳来て 採なもの 菓子や 余が酒をこのまざるを聞て家製なる
たれとて煉羊羹を恵ぬ味ひ江戸に同じ余越後にねりやうかんを
賞味して大に感嘆し岩居に謂曰此ねりやうかんも近年のものか
あり常のやうかんにくらぶれバ味ひまされり吾がそだちたるころハ常
のやうかんすら口中のきかの口には入らざりしに江戸をさる事遠き
此地にも出来逢のねりやうかんあるハ実に大平の徳化なりといひ
しに蓉岳も昏画をよくし文事もありて好事ものなれバなど
きゝてひざをすゝめ菓子ハ吾が家産なりねりやうかんと近来の

かのごとく由来を示し玉へとて余ぞうてのそく○寛政のそのころ江戸日本橋通一町目よと町字を式部小路といふ所ふ喜太郎とて夫婦ふて稚ひとりをつれ菓子屋とハ見えぬ簡子造ふかんだんもかくぞ坎喜太郎いせんハ　貴重の御菓子を調進する家の菓子杜氏なるよし奉公をもめてまくふ住し極製の菓子ぞうをせいして茶人又ハ富家のこんあきまひかりきさて此者ぐ工夫ととてもぐめて煉羊羹と名づけてうりけるふ羊羹字ハ羊肝なる事繼苑日鈔ふ

喜太郎ぐねりやうかんとて人こめづらしがりてめてそやもちれども一人一ふめてせいもちゆ名けふいうりきらしたりとてつひの重箱空しくうる事多くあり余ぐ目前ちくる所あるかくて一二年の間ふ菓子や二軒ふくく喜太郎をまねてねりやうかんとせいこそれゆめづくかりしふ今ハ江戸の菓子やいさらあり追こ弘り此

小千谷ふもあるべ坎国ふ市会をもる所ふハうれらずあるぐく又諸国ふもあるぐといひくまべ蓉岳ふらつて小倉美ちあり八重あつちんかりあるいまねらすぐとのつりとれらの事雪譜の名ふハ似気ちきべんもど本文小千谷のもやーふおもひいぐたれば人の話柄ふ記もりあハ近古食類の起原さあぐあれど余ぐ食物沿革考ふ上古ふり挙てもるーたまべこふハらせり

雪中の狼

初編ふもるーたるぐく我国の獣名ふいくまべ山を喩て雪浅国（さるこまと）雪ふくくして食ふとがきやるふり春ふくまもぐ

ふくの棲ふのるさまども雪いもるぐきえざるもの食ふたら寸ふ

ふーハ夜中人家ふちるり犬ぐとり又人ふかる事ふありこまを

山村の事ふり里ふ人多きもの名おもてきこらばるぬ雪中ふ

雪中狼入人家圖

穴居するハ熊のみなり熊ハ手に山蟻をまとひつけこれをなめて穴居の食とするよしいひつたふ○こゝに我郡中の山村に（不祥のことなれバ地名人名をはぶく）まづしき農夫ありけるが老母と妻と十三の女子七ツの男子あり此農夫性質篤實にしてよく母につかふひとゝせ二月のすゑ、用ありて二里ばかりの所へいたらんとするにこれ山道なり母いふやうこれハ用心なり筒をもてといふに実にもとて鉄炮をかたげゆきけりこれハ農業のかたはら獵をもなすものゆゑに国許の筒なりかくてようたしかへる時ついに日も暮かゝる頃かへりきて吾が村へ入らんとする雪の山陰に狼物を喰ふを見つけ矢頃にねらひよりて火蓋をきりしにあやまたず打おとしぬちかよりこれハいかにとみるに人の足なり農夫大におどろきさてハ村ちかくきつるならんと我家をきづかひ狼ハそのまゝにしてもせわしくかへりしに家のまへの雪の白きに血のくれなゐなる跡あるにこゝろまどひますますおどろきて馳せ入りければ狼二疋逃さりけり入りてみれバ母ハゐろりのまへにてのどくひちぎられて片足ハくひとられてぞありける妻ハ窗のもとに喰伏られありてこれもそのからだハさんざんにくひちぎられたるさまなり七ツの男の子ハ庭にありてかたちも半ハ喰はれてあり妻ハいまだ息ありて夫をころよりおきなげきて何事かおほかみ狼がといひしまゝ息たえけり農夫ハゆめともうつゝともおぼえず鉄炮もちて立あがりしがなすすべもなくても娘いかにしてあるらんとよびけるに床の下よりはひ出て親にすがりつきこゝろをおとしてなくおやもむすめもいだきあひてなきけり山家ハ住居もこゝかしこ大なるすきまあるものゆゑこゝろに事をまるものをありけり農夫ハ時の間に六十の母三十の妻七ツの子を狼の牙にかけられ口をしがり親子ふたりこゝろをひとつに

声をあげてあきなひくり村のものもうくふきくつけきくう妖体
とこておとろきたけびくまびれひくあつまりきくう娘よりう
きとたづねくまび凶とやぶりて狼三足をせいりーづるーハ竈
ふ火とたきておうしゆるやぐふ床の下へゆげ入りだぐきると母さま
とおとろぶあくてんときくて念仏ゆておくうとふくて妖ありきはと
いつづき呼へつげきらせ次の日のクぐまと棺一ツよ妻と童とをさ
め母の棺と二ツ野辺おくうとやーるるふ涙そそぐざるものいなのう
けるとでおゆつよたくぶ筒をかてといひーゆる母の片足と雪の山
蔭ふくらひゐる狼をうちおとして母の敵いとうくれど二足とゆら
ちーハいくふ口惜りくんこまつよりのち此農夫家と棄娘とつま
て順礼よでくうちきるゆるれば人のよくきるたゆーるり
百樹日日本の狼ハ幻化事をきくす唐土の狼ハだけること

老狐ゆこくあくす宋人李昉等ぐ太平廣記畜獸の部ふ四百四十二卷狼美
人ふ幻化して少年と通じあるひハ人の母ゆだけて年七十ゆありて
ちどめてだけをあらそして逃さり又ハ人の父を喰殺してその父
ゆだけて手を歴くるふ一日その子山ふ入りて来と採るふ狼き
たりて人の如く立其裾を銜くるゆる爺ふく狼の額と斫狼
ゆげ去りーゆる家ゆのりーふ父の額よ傷の痕あるを視て狼
あることをさとりことを教ふ果して老狼ゆり親をころくるる
ゆる自縣ふくりて事の由をつげくる事をゆで○廣異記○宣室
志を引てもろせり悍悪の事ふ狼の字をいふもの○殘忍ある
と豺狼の心とゆひ○声のゆとろーきと狼声とゆひ○毒の甚
きを狼毒とゆひ○事の猥と狼と○反相ある人と狼顧○
義无と中山狼○恣ま食と狼食○病烈を狼疾とゆひ○狼

籍○狼戾○狼狽など皆彼より譬て是をつかまつり（文海抜沙さまゝゞ）
獣中最可悪ハ狼なり余竊に以為狼ハ狼中にて狼なれ
ども人にして狼なるハよく狼をのゝくすゆゑ狼なるを
こゝせずこゝまづなるゝ狼毒をうくる人あり人の狼なるを
狼の狼なるよりも可惧可悪隼実を外面とし奸慾を内
心ともすると狼者とゝひ娼を悍戾を狼老婆とゝゝ巧ゝ狼心
をゝくすとも識者の心眼ハ明鏡なりおゝくゝ惧ざら
んや恥ざらんや

北越雪譜中巻終